

ラオスの こども通信

86号
2023年12月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- 子どもたちの明日の基礎をつくる本との出会い ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほとり「食」 ▶ p.4



*写真の説明はp4をご覧ください。

子どもたちの明日の基礎をつくる本との出会い —ポンホン小学校図書室を訪ねて—

ラオスの首都、ヴィエンチャンから北へ70キロほどにあるポンホン小学校。1年生から5年生まで275人が通っています。ここに「ラオスのこども」の募金・広報担当として訪問しました。

小学校に到着すると、すぐに花や木の絵が飾られた図書室が目に残りました。中に入ろうとすると、ある一点をじっと視ている子どもたちが見えました。その視線の先は絵本でした。



ポンホン小学校の図書室

この図書室は「ラオスのこども」が22年前の2001年、65番目に開設支援した比較的古い図書室です。

「ラオスのこども」は図書室を開設した後もフォローアップを行います。具体的には本の追加提供や図書室担当教員の再研修を行い、図書室が継続的に運営されるよう力をいれています。ポンホン小学校の図書室担当教員は2022年に再研修を受けました。

読書のもつ力

図書室では図書室担当のファンダ先生とシサモン先生が読み聞かせをしていました。子どもたちは、次はどんなことがおきることか、先生が読む話にじっと耳を傾け、絵本をしっかりと見ていました。ポンホン小学校では、授業の一環として学年毎に曜日と時間を決めて、子どもたちが1時間図書室を使っています。好きな絵本を選んで読んだり、上級生になると分からないことを事典で調べたり、先生から出された課題の本を読んだりします。

昼休みは、誰でも自由に図書室を使うことができます。小学校に入って初めて本と出会い、「読書が楽しい」と言う子どもも少なくないそうです。

校長のモニター先生は、「図書室を利用するようになってから子どもたちの変化は目を見張るものがあります」と話します。

「読み書きが上手になることはもちろん、話の筋道を考えて自分の考えや意見を相手にきちんと伝えられるようになります。さらに、語彙がふえて表現力が豊かになります」

と、読書のもつ力を説明してくれました。



先生が絵本の読み聞かせをしていました

カンパーの話が大好き

人一倍熱心に先生の読み聞かせに参加している男の子がいました。5年生のブンパス君です。

「家には本が一冊もないので、入学して図書室でたくさん本を見てすごく驚きました。図書室で読みきれない本は借ります。家に帰ってから読むのがすごく楽しみで、宿題もしなくちゃいけないけれど、ついずっと読んでしまいます」

そこで、図書室で一番好きな本は?と聞くと、すぐに、『カンパーとピーノイ』(p2写真右)と『カンパーとナーンガー』(左)を持ってきてくれました。

地域でささえる学校図書室がスタート



雨による悪路をトラクター通学(ナムクアン中等学校)

ヴィエンチャン県サナカム郡、ムーン郡の完全中等学校(中学・高校)8校で、図書室整備と有効活用の3年にわたるJICAとの連携事業が5月にスタートしました。

地元の行政が主体となって活動を続けていくことを柱とし、県・郡教育局を中心としたプロジェクトチームが立ち上げられました。学校、村教育開発委員会(VEDEC)、郡教育局、当会の四者でオリエンテーション会議を開き、それぞれの役割を明記した文書を書き交わしました。



研修で学んだ紙芝居を早速お披露目

そして8月には、それぞれの郡で各校の図書室担当の先生、副校長、村教育開発委員会が一堂に会して「学校図書室運営ワークショップ」を行い、学校図書室の運営や計画作り、さらにSNS活用について一緒に学びました。こうしてじっくり下準備をして、11月に各校で学校図書室を開設・リニューアルしました。

今回は、いつも以上に地元関係者の皆さんに助けられました。長雨でナムクアン中等学校までの道が通れなくなり、急遽、その村に住んでいる別の学校の副校長が車を出してくれたり(後で家族がナムクアン中等学校の図書室教員なのが判明)、県・郡教育局のスタッフがゲストハウスに駆けつけて、土日返上で図書ラベル貼りを手伝ってくれたりしました。



以前の研修(外務省N連事業)を受けた他校の先生による読み聞かせ

また、同県内で前回の事業で研修に参加した学校図書館の先生たちが、助っ人として、来館者記録のつけ方や読み聞かせを、今回の担当の先生やボランティアの生徒に実演してみせたり…まさに「助け合い(スワイカン)」で成り立った活動でした。(JICA草の根技術協力事業「中等学校における学校図書室の役割拡充を通じた教育改善事業」)



質問にしっかり答えるブンパス君

好きな言葉は「助け合い」というブンパス君。おじさんが警察官なので、自分も将来警察官になって困っている人を助けたいとのこと。大好きな絵本から「助け合い」が大切と思うようになったのかと、ふと思いました。

これまで、これからも

「ラオスのこども」はこれまで40年にわたり351校で図書室の開設支援を行い、ラオスの全公立学校の1/4に当たる3,000以上の小学校や中学校で図書の配布を行ってきました。ポンホン小学校図書室では、初めて本に出会い、読書の楽しさをおぼえ、視野を広げている子どもたちに会い、話しを聞くことができました。まだまだ読書環境の整備が不十分なラオスの現状を考えると、明日の基礎をつくる本との出会いをラオスの一人でも多くの子どもたちに提供する必要があります。これまでの実績を基にして、ご支援くださる皆さまのご協力を得て、これからも着実にラオスの子どもたちの読書環境の改善に努めていきます。

(伊藤久平/ラオスのこども 募金・広報担当)

冬募金にご協力ください。

目標額90万円

(図書室開設1か所約30万円)

ラオスで本屋はほとんど見かけません。本に触れる機会がとて少ないラオスの子どもたちの成長と将来に図書室の果たす役割は非常に大きいです。当会はこの思いのもとに、ラオス全土で図書室を開設してきました。



図書室の開設式(ヴィエンチャン県ゲオクー中等学校)

冬募金で3か所の図書室を支援する計画です。子どもたちの未来のために、ご支援をくださいますようお願いいたします。ご協力の方法はQRコードを読みこんでください。



中等学校の図書室開設と
図書室ボランティアの生徒たち

9月25～29日、首都ヴィエンチャンに隣接するヴィエンチャン県
の中等学校2校で図書室開設式が行われました。



みんなで開設の準備

東京事務所でインターンを務めた私(矢野みなみ/インターン)は、大学生活最後の夏休みにラオス事務所に出張し、東京から送り届けられた絵本が現地で手に取られる瞬間を目にすることができました。

絵本を届けた学校などで、子どもたちから様々な話を聞くことができました。なかでも印象残っているのは、中国との関係性についてです。中国語学習の本が取り合いになるほどの人気で、卒業後は中国企業で仕事をするために中国語を学びたい子が多いとのこと(この中等学校では外国語の授業は英語のみです)。



図書室ボランティアから届いた写真

その一方でラオス国内の産業が伸びず物価が高騰していることも問題視しているようで、「ラオスが自分で作っているのはこの水だけ。これは安いよね」と、そこに置いてあった水のペットボトルを私に見せました。私が質問したのではなく、自発的に話してくれた話題です。中高生ですでに自分や国の将来についてしっかりと考えているなど感心したのですが、物怖じせずにこういった話ができるのも彼らの年頃の特権かもしれません。

後日談ですが、図書室ボランティアの生徒たちから嬉しい便りが届きました。今日も図書室に来たよ、こんなにたくさんの生徒が来ているよ、という写真です。他にもSNSで「暇な人は図書室においで!」と呼びかけたり、図書室ボランティアの仕事をする様子を投稿したり。図書室と対極にあるように思われるスマートフォンがここで活躍してくれるとはびっくり。これからもすてきな報告が来ることを願っています。

ラオスに絵本を運ぶ ご協力をお願い

ラオス語絵本プロジェクトに多くの参加をいただいておりますが、2年前からラオスへの船便が運休となり、東京事務所でお預かりした状態が続いています。理事やボランティアが少しずつ運んでいます約500冊残っています。日本国内の空港まで10kgキロまたは20kgの箱を送りますので、ヴィエンチャンまでの運搬をお願いします。ご協力いただける方は事務所までご連絡ください。(alctk@deknoylao.net tel:03-3755-1603) 現地での調整があり、余裕をもって連絡いただけると幸いです。

紙芝居『これはジャックのたてたいえ』
できあがりしました

イギリスの伝承童話で押韻詩のマザーグースからの一話を紙芝居作家のやべみつのりさんが紙芝居にした作品です。1983年に日本で出版し、ラオス語版は2009年に最初に出版。リズムカルな言葉遊びが特徴です。

再版の希望が多く寄せられて、2022年春に実施したクラウドファンディングでのご支援で再版が決まりました。しかし、印刷費の高騰、紙芝居に必要な紙の取り寄せなど、予算が予想以上にかかり、完成までには時間がかかりました。また、やべさんの原画の色合いを忠実に再現するために、日本でスキャンをし、ラオスで編集・印刷をして10月に1,000部が完成しました。

一人で演じるのが通常の紙芝居のスタイルですが、豊かな口承文化を持つラオスの人びとは伝統のスーン(詠唱)と結びつけました。さらにラオスでは、リレー式にしたり、絵の当てっこをしてカルタのようにしたり、楽しみ方を広げています。



太鼓とともにみんなで演じます

2023年通常総会を開催

ラオスのこども通常総会を9月16日、ライフコミュニティ西馬込で、オンラインを併用して実施しました。活動会員38人が出席し(書面表決者と委任状提出者含む。オンライン参加者は9人)、活動協力者5人を合わせて、合計43人が参加しました。

2022年度の事業報告案・決算報告案及び、理事の承認・監事の選任に関する事項が承認され、2023年度の事業計画・予算及び、第9次中期計画が報告されました。

第2部は代表のチャントソンが最近のラオス事情を話し、参加者からの様々な質問を交えて和やかな懇談会となりました。

オンライン授業を今年も開催

学習院女子大学国際コミュニケーション学科のオンライン授業で、東京の教室と、ラオス事務所、そして支援しているヴィエンチャン県の学校図書館などと3回にわたりライブ中継をしました。



ラオスの図書館担当の先生方とは、読書で得られる効果について語り合ったり、子どもたちとは将来になりたい職業について話したり、子どもたちからは学生への質問(「どんなスポーツが好きか?」「もちと大福、どっちが好き?」)が出たりと、日本側ラオス側双方にとって、交流と学びの機会となりました。

「ラオスのこども」の仲間たち

子どもたちの豊かな未来のために

佐々木美咲さん(インターン)

大学でラオス語を専攻し始めて3年が経ちそうです。元々東南アジアに興味を抱いていましたが、ラオス語を学ぶことになったのは運命的なもので、高校生のときには全く想像していませんでした。初めて知る文字や発音に日々圧倒され、実は今もなお苦しんでいます。

コロナ禍で渡航できませんでしたが、今年の3月によく訪れることができました。2週間という短い期間でしたが、ラオス語漬けの充実した時間でした。ラオス国立大学の学生など現地の人々とラオス語でコミュニケーションがとれて嬉しかったのを覚えています。ラオス語学習のモチベーションもぐっと上がりました。さらに、ラオス料理はとてもおいしく、特にカオ・ピアックというもちもちの麺料理が一番のお気に入りです。日本人は絶対好きな味だと断言できます。

私がインターンを始めたのもちょうど同じ頃でした。これまで大学で学んだことを活かしてラオスに関わりたいと思ったのがインターンを探し始めたきっかけです。偶然ウェブサイトを見つけ、「ラオスのこども」では、図書室の建設や奨学金事業など、ラオスの子どもたちに教育を支援する活動を行っていると知りました。私は教育とは将来の選択肢や可能性を広げるものだと感じています。ラオスには経済的理由やアクセスの悪さから満足に教育を受けられない子どもたちがいます。ラオスの子どもの未来を豊かにする教育支援活動に携わりたいと思い、「ラオスのこども」でインターンを始めて現在に至ります。

インターンとして、ピーマイパーティやラオスフェスティバルなどに参加し、ラオスに興味を持っている方が多いことにいつも胸がじんわりと温かくなります。大学での学びをラオスに役立てられるよう邁進していきます。これからも皆さんからご支援いただけますと幸いです。



表紙の写真

ラオス事務所のスタッフがボンホン小学校の子どもたちに紙芝居を演じています。子どもたちは、その語り方、絵の見せ方に、目が輝き口も開いてすっかり虜になったようです。「ラオスのこども」の図書館基礎研修では紙芝居の上演の仕方についても学びます。

特定非営利活動法人ラオスのこども

組織の理念「ラオスのこども」は、公正で平和な社会づくりに貢献することを目的として、子どもたちが自らの力を伸ばし、人生を主体的に選択できるよう、日本とラオスの人々が協働しながら、読書に親しむ環境をつくりまします。

ラオスのこども通信 86号

2023年12月発行 代表:チャントソン・インタヴォン 編集人:森透
発行: Action with Lao Children / Deknoylao
(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども
〒143-0025 東京都大田区南馬込 6-29-12 ミキハイツ 303
TEL/FAX 03-3755-1603 e-mail: alctk@deknoylao.net
https://deknoylao.net
都営地下鉄浅草線西馬込南口下車徒歩7分
郵便振替 00140-6-462494



未使用はがき・切手の寄贈を受け付けています

一昨年からはインターンを中心に実施している「書き損じハガキプロジェクト」。今年度も第3弾を実施します。2021年度は学校図書室の開設、2022年度は絵本の出版を目標として多くの寄付をお寄せいただき実現できました。



第3弾は、学校図書室の開設を目標として、佐々木さんを中心に3人のインターンがキャンペーン活動中です。お手元にあるものご寄付はもちろん、お知り合いへの紹介など、ご協力をお願いします。

メコンのほとり 食

ある日の食事

取材で訪問した学校のあるボンホンで2泊した宿は、町から離れたところにあるため、食事は毎回車に乗って行かなくてはならず、とても不便でした。そこでラオス事務所のスタッフのバンロップと通訳のクアントンさんが相談し、市場で材料を仕入れて、宿の台所で調理してもらうことになりました。

どんな手料理が食べられるのか楽しみにしていたところ、市場で仕入れてきた食材は・・・アヒルが一羽、ペットボトルに入っているそのアヒルの血、それと数種類の野菜でした。それらを設備が整っているととても言えない台所でバンロップと宿のオーナーの女性が調理してくれました。

待つこと数十分、アヒルは3皿に姿を変えて夕食のテーブルに並びました。

手際よく切り分けられたアヒル

市場で野菜を買う
通訳のクアントンさん



調理されたアヒル料理



3皿の内容は素揚げ、野菜と肉のスープ、アヒルの血の入った野菜の炒め物と、主食の蒸したもち米で、どの料理もとてもいい味加減でした。これで大人4人が満腹になり、さらに翌日の朝食にも残りをいただくことができました。もう一度食べたい、これが正直な感想です。

(伊藤久平)